
1月15日 「天の国でいちばん偉い者」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 18章1～5節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

大きな主題は天国、次主日もまた天国です。天国とはどのような場所なのか、どのような世界なのかを語るテキストです。地上の弟子たちには、「いちばん」また「偉さ」ということへの強いこだわりがあります。つまり、天国をなお地上の価値観の延長線上にイメージしているわけです。しかし、主イエスは逆転させます。自分を低くする人。低い人を受け入れる人。そこに、天国を目指して生きる神の民の地上における倫理が示されます。天国の価値基準、つまり神の価値観を知ることによって、地上の価値観に流されない信仰の土台は据えられてまいります。私どもの現実、何度も壊され、流されてしまう脆弱な土台でしかありません。しかし何度でも、この土台を据え直すことが許されています。天国の価値基準のゆえに、罪人であるわたし自身が救われた驚くべき奇跡とその幸いを、子どもたちに証ししたいと思います。

「天国に入る」

皆さんは、これまで「一番」になったことがありますか。勉強とか運動など、絵とか作文とか、なんでもかまいませんから、クラスで一番とか、一等賞になったことがあるお友達はいませんか。

きっと、「これまでそんなことは一度もありません」というお友達も多いと思います。反対に、「ビリになったことならあるよ」というお友達もいるでしょう。

一番になったことのあるお友達は、きっと、「どう？　すごいでしょ！」という気持ちになったかもしれない。ビリになったときには、「悔しい、恥ずかしい、もうイヤ……」って思ったかもしれません。

さて、ある日のことです。いつものように、イエスさまは、一生懸命、天国のお話を語っておられました。お弟子さんたちは、何十回も、何百回も、天国のお話をきいていたのです。ところがその日、お弟子さんたちは、実はいつも心の中で考えていたことを、とうとうおさえきれずに、イエスさまに質問しました。

どんな質問でしょうか。「イエスさま、いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか。」

このとき、お弟子さんたちはきっとこんな気持ちだったはずですよ。「イエスさま、もちろん、イエスさまの弟子たちのわたしたちこそ、もっとも偉いということは、分かっています。でも、そのなかでも、いちばん偉いのは、誰ですか。」

おそらく小学生のお友達なら、もう知っていると思います。実は、わたしたちは、いつも自分と誰かのことを比べたがっていると思うのです。そして、自分のほうが勝っていると思うと、すぐに自慢したくなってしまって、自分の方が負けていると思うと、自分なんてだめだな、なんて思ってしまうのではないですか。あがったりさがったり、さがったりあがったりしてしまうことが、多いと思います。

お弟子さんたちも、実は仲がよさそうですが、心の中で、ライバル心があったわけですよ。彼には負けたくない、負けるはずがない、負ける気はない……という気持ちです。

とうとう、抑えられなくなって、イエスさまに白黒をはっきりつけて頂きたくなくなってしまったのです。

さて、イエスさまは、お弟子さんたちの質問を聞かれました。すると、そばにいた、一人の子どもを呼び寄せて、「さあ、こちらに来てください。」とおっしゃいました。

実は今から2000年前、イエスさまの時代は、子どもたちは、大切にされていませんでした。今では考えられないかもしれませんが、子どもは、ひとりの人間としてみとめられていなかったのです。

ところが、イエスさまは、子どもたちをお弟子さんたちの真ん中に立たせられました。つまり、大人の人たちが真ん中ではありません。お弟子さんたちが真ん中でもありません。ひとりの人間としては、まだ認められていなかった子どもを真ん中にされました。つまり、天国は、このような子どもたちが真ん中にある場所なのだということです。

イエスさまは、こうおっしゃいます。「はっきり言います。心を入れ替えて子どものようにならないければ、決して天の国に入れません。」つまり、心を入れ替えて、子どものようにならないと、天の国でいちばんになるどころか、天国に入れないのです。これは、大変なことです。

それなら、「心を入れ替えて、子どものようにな」というのは、どういうことなのでしょう。イエスさまは、こうもおっしゃいます。「自分を低くして、この子どものようになる人がいちばん偉い。」

心を入れ替えるということは、考え方を変えるということです。だれが一番偉いのかという考え方を変えるということです。変えるということは、「ちょっと」変えるということではありません。逆、正反対にするということです。

きっと、お弟子さんたちは、大人の反対だけではなく、偉いの正反対も、子どもたちだと考えていたのです。子どもなんて、イエスさまのお弟子さんになることなどできないし、イエスさまのお

役に立つことなんて絶対できっこない。むしろ、子どもなんて邪魔になるだけだ、そう考えていたようです。

ところが、イエスさまは、まったく違います。イエスさまは、子どもたちがイエスさまのところに来ることを、大人が来る以上に、喜ばれ、歓迎されました。それは、イエスさまのまわりに、いつも病人や苦しみ悲しんでいる人たちがいたようにです。つまり、イエスさまは、当時の人々からは、顧みられなかった人たちを、いちばん、お心にかけておられたのです。

当時の人たちは、子どもたちのことを、「後にしておいて構わない」と考えていました。ところが、イエスさまは、子どもたちのことを一番大切に考えておられたのです。

そればかりではありません。なんと、イエスさまは、大人たち、つまり、少しでも人より偉くなろう、力のある人になろう、思い通りにできるような人になろうとする人ではなく、子どもたち、つまり、自分ひとりでは生きていくことのできない、弱い人たちを、ご自身と重ね合わせて見ておられるのです。だから、イエスさまは、イエスさまを受け入れる人は、子どもたちを受け入れなければならないのだと、強く、激しく教えられました。

イエスさまが、先生をお救いくださったのは、先生が、偉かったり、すばらしかったからではありません。正反対です。イエスさまは、そんな弱い先生だからこそ、大切にして、お救いくださったのです。つまり、天国には、小さな人が入れるのです。

神さまの子どもとされたことを今日も心から感謝します。いつまでも、神さまの前に、小さな、弱い子どもであることを、心に刻みましょう。そして、イエスさまの考え方を身につけましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 18章4節

自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。

〈ねらい〉

偉くなりたいという子供はあまり多くはないでしょうけど、一番になりたいと思う子供はたくさんいるでしょう。地上の世界では、何でも一番になることが賞賛される世界です。親も学校の先生もトップを目指すことを奨励します。そして私たちも……、まず私たち自身の価値観を顧みる必要があるのかもしれません。そのような価値観とは正反対の天国の価値観を語ります。その価値観は世においては、平和と愛をもたらすことでしょう。

〈展開例〉

【お話】

ペトロさんの他にイエスさまのお弟子さんの名前を知っていますか。ヨハネという弟子もいました、ヤコブという弟子もいました。ペトロ、ヨハネ、ヤコブという三人はいつも自分こそ一番だ、という思いで、イエスさまのお手伝いをしていました。その三人がとても気になることがありました。それは天国では誰が一番えらいのだろうということです。みなさんは天国を信じますか？人はやがて死に、天国か地獄へ行きます。みんな天国へ行きたいですよね。ペトロも、ヨハネも、ヤコブもみんな天国へ行きたいと思っていました。そして天国でも自分が一番になりたいと思っていたのです。

ある日、三人はイエスさまに尋ねました。「天国では誰が一番偉いのでしょうか。」するとイエスさまは、「〇〇くん(ちゃん)ここへおいで。」(*実際に一人の生徒を呼び寄せましょう。)こんな風に近くにいた子どもを呼び寄せました。そして言われました「心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天国に入ることができない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国で一番偉いのだ。」ペトロもヨハネもヤコブもこの答にはびっくりでした。子供のようになるってどういうことかな？会社をやめて、おうちのお仕事もやめて、もういちど幼稚園や保育園へいくことですか。お父さんやお母さんがそんなことをしたら大変ですね。イエスさまが教えてくださいましたことは、「おとうさんやおかあさんに

いろいろなことをしてもらっていた子供の頃を思い出さない。あなたがたは子供の頃はみんな弱かった、力もなかった。一人で生きてはいけなかった。食べるものも、飲むものも、着るものも、みんなただで与えられた。おなじように、イエスさまを信じる人はすべて、ただで天国へいけます。また天国ではみんな自分のことよりお友達の方が大切なので、競争がありません。みんな助け合っているんだよ。」ということです。

【祈り】

天のおとうさま、わたしたちには、罪があるのに、ただで天国へいけますことを、ありがとうございます。そしてみんなやさしくて、助け合っている天国へ私も行けますように。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム(天国)〉

てんごくでは、みんなたすけあっているの、

きょうそうがない。

〈暗唱聖句カード〉

こどものように



自分を低くして、この子供のように
なる人が、天の国で一番偉い
のだ。(マタイ8:4)

ねらい

弟子の中で誰が一番偉いのかという議論に対して、イエス様の答えは、天国で一案偉いのは子供である、という返答であった。この聖句では、心の中で自分を低く考えることがポイントであると書かれている。「子供は弱く、誰かの助けがないと生きていけないという可塑性があるからこそ、教育の可能性がある」と言ったのはルソーであるが、イエスも子供を神の国の住民として高く評価している。子供を比喻にした大人への教えではなく、文字通り、どの子供も神の国に属する性質を持っていると考えたい。

展開例

フランスのルソーという教育者は、「子供の発見者」とも言われています。子供は誰よりも弱い存在であることを、「可塑性」(外部の力に

よる変形がそのまま残る)の性質を持っていると表現して、教育の可能性の根拠だと考えました。

イエス様は、だれよりもまず子供が神の国に一番入りやすいと言いました。その理由は、力がなく弱いので、誰かに頼る気持ちがいっつもあ、ということでしょう。その頼る気持ちが神様への信仰につながるきっかけとなるということです。

マルコ福音書10章16節には、イエス様は「子供を抱き上げ手を置いて祝福された」とあります。子供を単なる教材としたのではなく、本当に子供を受け入れていることがわかります。

祈り

神様は子供を愛し、祝福して、実際に受け入れてくださる神様であることを心から感謝します。

～話し合ってみよう～

なぜイエス様は子供が大好きなのかを話し合ってみよう。

聖書日課

マタイ 18 : 1～5

😊 自由メモ 😊

暗唱聖句

自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。

(マタイ18:4)

〈ねらい〉

弟子たちの天の国の理解はまったく間違っていました。彼らはこの地上における価値基準で天の国を理解していたようです。

それは、この地上では価値ある者が重要視され、また、尊ばれ、偉い人と呼ばれますが、天の国ではもっとも価値のない者、もっとも小さな者が、神さまから尊ばれ、価値ある者と見られるのです。

ここに人間の考えや思いと、神さまのみ心とはまったく正反対であることがわかります。神の国、天の国の価値基準が、真理であり、公平であり、正しいのです。

〈展開例〉

イエスさまは、いつも天の国について語られ、そして、天の国をご自身が示されました。イエスさまがおいでになられたのはこのためでした。しかし、弟子たちの天の国に対する理解は不十分というよりも、全く正しく理解できていなかったのかもしれませんが。天の国は肉の目、肉の心では理解できないものです。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネによる福音書3章3節)

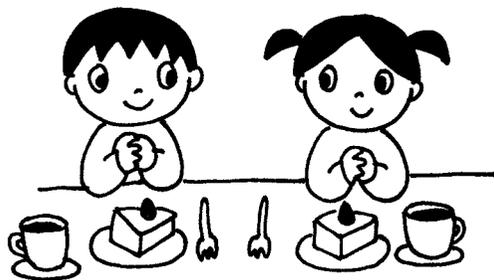
「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」とイエスさまにお聞きした弟子たちの天の国の理解は、この地上の事柄と同じような理解だったようです。この地上で偉大な人たちとは、

世の人たちの上に立ち、大きな仕事ができる人であり、重要な人物であり、人々を従わせることができる地位にある人たちなのです。しかし、イエスさまは、「はっきり言っておく。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできないのだ。自分を低くして、この子どものように、自分を価値のないような者になる人が、天の国でいちばん偉いのだ」とおっしゃいました。

イエスさまの語られ、示される天の国の福音はこのようなものであり、この地上で、悲しんでいる人たち、心の貧しい人たち、病の中にある人たち、義のために迫害されている人たち、飢えの苦しみの中にある人たち、価値のない人と見られている人たち、罪人とされている人たち、彼らのために天の国の福音はあるのです。イエスさまは今も、彼らと共にいて、福音を、愛のわざを待たれているのです。「わたしの名のためにこのような一人の子どもを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」

天の国の福音は、その人たちが持っています。わたしたちが、彼らを受け入れるとき、そこから聖霊は流れ出し、わたしたちに真の天国の福音が示され、神の国を見ることのできるのです。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイによる福音書25章40節)

神さま ありがとうございます



対話の手掛かりとして…

- ① 集団生活を営む私たちは、いつも順位や人の評価を気にしながら生きてしまうところがあります。もちろん、一番になることがわるいことではありません。一所懸命努力して、目標に到達することはとても大きな喜びです。しかし、自分より順位が上の人や、自分にはない優れた点を持っている人を見ると、羨ましくなったり、妬んでしまうこともあります。逆に、自分が誰かより上になったとき、自分より下のものを見下してしまうことも少なくありません。人間というのは、ある意味単純なところがあって、上位になることができたり、周りから良い評価をいただくと嬉しくなります。しかし、自分が周りに比べて劣っていることが分かったら、すぐに機嫌がわるくなるのです。
- ② 主イエスを信じ、いつも主の言葉を聞いている弟子たちにとっても、「だれが一番偉いのか」という問題はなお根深く残る問題だったようです。主イエスは、「だれが天の国でいちばん偉いのですか」という弟子たちの質問にどうお答えになったのでしょうか。また、天の国に入ることができるのはだれなのでしょう。主は、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(2節)とお答えになりました。つまり、天の国に入ることができるのは「子供」です。では、大人になった私たちは天の国に入ることはできないのでしょうか。そうではありません。もう少し丁寧に主の言葉に聴くと、「心を入れ替えて」とあります。子供のようにならなければいけないのは、「体」ではなく「心」のことでです。
- ③ さらに問いが重なります。子供のような心とは、どういう心のことなのだろうと。子供のように純真無垢な人になるということでしょうか。どうもそうではないようです。主は「自分を低くして、この子供のようになる人が……」(18:4)

とおっしゃいます。「自分を低くする」と聞くと、偉そうに振る舞わず、いつも謙遜な心を持って生きる人になることだと考えます。しかし子供は、皆、謙遜なのでしょうか。むしろ、誰が偉いかをよく競い合うのではないのでしょうか。また自分を誇ったり、卑下したりしてしまう罪の中にある存在でもあるのです。

- ④ 「一人の子供を受け入れる」(18:5)とはどういうことでしょうか。当時、子供は無価値な存在とされていました。主イエスは、そのように受け入れるに値しない子供を受け入れることが、キリストを受け入れることだと言います。考えてみますと、私たちの信仰の源は、神さまに受け入れられることから始まります。「子供」とは親に受け入れられ、愛されている存在です。そして、それは、子供の立派さや純真さのゆえに受け入れてくださるわけではありません。私たちは罪深い者ですが、神さまにとっては子供であることに変わりありません。それゆえに、神さまは、御子キリストをお遣わしになり、主の贖いのゆえに、私たちは父なる神の愛を疑わずに、より頼んで生きていくことができるようになったのです。
- ⑤ 神さまが小さな私を重んじてくださったにもかかわらず、なお子供になり切れないことや、自分や他人を重んじることができないことがあるかもしれません。しかし、神さまによって子供とされたことを信じる私たちは、キリストが受け入れてくださったように、私たちも小さな者を受け入れていくことができる心に変えられています。心が変われるとは、私たちが神さまの子供として、神さまのことを「父よ」と祈りつつ生きる人のことではないのでしょうか。神さまに祈り、悔い改めて歩み出す時、もう一度、小さな者を受け入れるという生き方へと押し出されていくのです。

〈はじめに〉

マタイによる福音書20章1節～16節は、主イエスが19章23節から弟子たちに語った天の国についての話の続きである。19章26節で、主イエスは、天の国に入ることについて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と語り、神に主権があることを示した。

その後、弟子たちに「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」(19章29節～30節)と語った。主イエスは、弟子たちに自分の持っているものをいっさい捨てたものだけが永遠の命を受け継ぐことができると教えられた。「永遠の命を受け継ぐ」は、言いかえると「天の国に入ること」である。弟子たちは、天の国に入るために自我を捨て、いっさいを神に明け渡すことが求められている。

そして、20章1節から天の国のたとえとして「ぶどう園の労働者」の話をした。話の構成は以下の通りである。(1節～7節)労働者の雇用、(8節～10節)賃金の支払い、(11節～12節)主人への不平、(13節～15節)主人の返答、(16節)結論。以下、この構成に従って注目したい部分をみていく。

〈労働者の雇用—1～7節〉

ここで、家の主人は、「夜明け」、「九時ごろ」、「十二時ごろ」、「三時ごろ」、「五時ごろ」と頻繁に労働者を雇うために出かけて行く。

〈賃金の支払い—8～10節〉

主人は、約束通り(2節)、労働者に賃金として一デナリオンを支払った。

〈主人への不平—11～12節〉

労働者の主人への不平は、暑い日を辛抱してま

る一日働いた自分と、後から来て、一時間しか働いていない者が同じ賃金であることは、おかしいというものであった。

〈主人の返答—13～15節〉

主人は、不平を言った労働者に「友よ」と呼びかけている。このことに注目したい。

そして、15節で「自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか」と言って、賃金の支払いについては、主人に主導権があることを強調した。この主人が支払う賃金は、労働時間とは全く関係がない。主人は、全く恵みとして賃金を支払う。

〈結論—16節〉

19章30節で主イエスが語ったことが少し変更されて語られる。また、ルカによる福音書13章30節にも少し違う形で語られている。

〈まとめ〉

働きに応じてたくさんの賃金がもらえると期待した人は、自分が与えられた分に満足しない。逆に「だれも雇ってくれないのです」(7節)とあきらめていたような人でも、主人から充分な賃金がもらえる。

天の国に入ることは、人の働きの程度で決められるのではない。人が努力して天の国に入れるようになるわけでもない。天の国は、人の努力で勝ち取るものではない。

人が天の国に入ることができるのは、労働者を雇うために何度も出かけて行く主人の熱意が背後にあるからである。主人は、熱意を持って雇った労働者に分け隔てなく同じだけの賃金を払ってくださる。

すなわち、神は、御自身の熱意で救いに選んだ者に分け隔てなく恵みを与えてくださる。

(浅野正紀)